

4-12

主題 食事から見えてきたその人らしい生活

食事摂取

副題 食事摂取量アップへの取り組み

食事環境作り

研究期間 6ヶ月

事業所 特別養護老人ホーム 扇

発表者：小平 誠（こだいら まこと）

アドバイザー：

共同研究者：戸井田 実奈（といだ みな）

電 話 03-3856-1199

メール oogi@seifuukai.or.jp

FAX 03-3856-1711

URL http://www.seifuukai.or.jp/

今回発表の
事業所や
サービスの
紹介

社会福祉法人聖風会が運営する特別養護老人ホームです。平成5年4月開所し
特養76床、ショートステイ4床、デイサービスセンター、ケアマネジメント
センター、地域包括支援センター、ヘルパーステーションが併設されています。

《研究前の状況と課題》

対象者・・・I氏 女性 90歳
ラクナ梗塞・狭心症
認知症あり 要介護5
〈食事形態〉
主食 粥 副食 ソフト食
水分 トロミ使用

入所し1年が経った頃から、食事・水分摂取量が徐々に低下してきている。ご家族からは出来る限り経口摂取を続けてほしいと希望あり、時間をかけて食事介助を行ってきた。毎日のように息子様の面会があり、一緒に過ごされている時のI氏は表情が良く、多弁な様子が見られている。息子様もI氏と過ごされる時間を大切にしており、少しでも多く2人で過ごす時間を提供できるよう努めていく必要がある。

《研究の目標と期待する成果》

徐々に食事・水分摂取量が低下している為、食事内容や介助方法を検討し、食事環境を整え、食事・水分摂取量を確保できるようになる。
又ご家族の希望である経口摂取を1日でも長く行える事で、体力を維持しご家族と過ごす時間も大切にしたい。

＜具体的な取り組みの内容＞

＜食事環境の工夫＞

- ・食器を手にとって頂く
- ・食器の配置の工夫。
- ・食事介助時の介護者の位置。
- ・食事摂取時の姿勢。

＜御本人の状態の把握＞

- ・体力面からの離床時間の検討。
- ・嚥下、咀嚼状況の確認。

＜食事形態の工夫＞

- ・水分摂取をゼリーで施行。
- ・水分を刺激ある冷たい物で提供。

＜御本人の嗜好を探る＞

- ・甘い飲み物、食べ物を提供。
- ・ご家族からご本人の好きな食べ物を伺い、提供。

＜ご家族の意向の確認＞

- ・「安全に美味しく食べられるように」
- ・「口から食事が摂れるように」
- ・入所当時とI氏に対する意向の変更がないか伺う。（ご本人と意思疎通不可の為）

《取り組みの結果と評価》

- ・右側からの反応が鈍く、失認・半盲の可能性がある事がわかり、左側より食事介助行くと開口良好であった。
- ・ご本人の体力面から見て、食事時間を離床してから30分程度と決め集中させる事で、摂取量を確保する事に繋がった。
- ・落ちていた食事摂取量が、食事介助の方法を職員間で統一する事により、2分の1以下だった摂取量が、現在3分の2程まで確保する事ができている。
- ・嚥下・咀嚼状況を確認し、現在施設で取り組んでいるソフト食が適している事がわかった。

《まとめ》

- ・今回の取り組みを通して、ご本人の状態把握、食事介助方法や食事形態の見直し等を行い、その方に合った援助方法を行う事で経口摂取維持が可能となることが分かった。又、必要な栄養を確保できている事により、体調面も安定しご家族と過ごす時間が増える事にも繋がる事を改めて学んだ。
- ・胃ろう造設のご利用者が増加する中、今後も同じような事例が取り上げられる事が考えられるが、経口摂取維持の取り組みから、その方の生活の質の向上に繋がれるよう取り組んでいきたい。

《提案と発信》

「1口でも2口でも良いので最後まで口から食べて欲しい。」というご家族の願い。自然のままを望まれるご家族もいれば、経管栄養を決断するご家族もいる。いずれにしても医療が密接に関り施設で対応できる範囲に限りが出てしまうが、今自分達に出来ることに着目し、日頃取り組んでいる援助から、ご利用者の生活の質の向上に繋がるよう日々努めていきたいと思う。

【メモ欄】追加資料 有 無